

おけいこ帰りの懐かしさ

津田 尚美

私の実家は船大工町で医院を開業していましたが、戦時中は一時、丸山の上、小島の方に疎開しておりました。戦後は再び賑やかな、榎津町に下って参りました。

私が踊りを習い始めたのは戦後の昭和二十三・四年頃からで其の頃の「ケイコ場」は「小島の桜道」の登り口にありました。其の後、ケイコ場が丸山の下、本石灰町にある「見かえりの柳」の右から「思い切り橋」の細い路地を入った所に移りました。

其処からのおけいこ帰りには、いつも誰かと一緒に丸山の入口にあった大きなネオンの下を通って、賑やかな石灰町を稽古がえりの「ケダシの着物」をきて、オシャベリをしながら帰っていました。それは今でも私の懐しい思い出の一つなのです。

ケイコ帰りの寒い日には、袖の中に両手を入れて胸にあて「オヨリマッセ、ヨリマッセ」と丸山の人達の呼び声を真似ながら、子供どおしで、お互いの肩をぶつけ合いながら坂を歩いて行きました。



銅座町くち踊「長崎五人女」(筆者本人出演)

丁度夕方の四時、五時頃は、芸者さん達が、お座敷にタクシーでそろって行かれるために、検番に集まってこられる時間でした。その芸者さん達から私達に「おったち子供は、ソングン遊びは止めまっせ」と云われ「ハイ」と深妙に返事をしたものです。

その芸者さん達とは皆、顔なじみになっていたのです。それは、踊りのお師匠さんのオケイコ場で一緒になったり、「春の踊りの会」では「地方さん」になって下さったり、時には小道具を揃えて下さったり、着物の着つけを直して戴いたりしていたのです。

私達はどこまで分かっておりましたのでしょうか。今も想い出すと笑えます。この頃は十代に入ったか入らなかつた頃の事で「踊の藤十郎」は習ったのですが「藤十郎の恋」は、まだ良くわからなかつたと思います。そこから先は小ばしりで小島街道を一人で自宅まで帰ったのでした。

お正月のお稽古は、七日か九日に鏡開きが始まりました。踊りのお稽古始めにはお師匠さんから御祝いのお屠蘇と「お善哉」をいただくのですが、その時の座わる順序は年かきの順でなく入門した順に座るものでした。休んでばかりいる子が先の方に座っているので、横の子に其の事をつけていると、古かぶの姉さん弟子が私達に「静かにしまっせ」と私達に言っているの子のそばに行き「ようおいでなはいました」と大きな声で言われていました。「お善哉」を戴いたあと二、三組が「ひと節」ずつ初踊を致しました。

私は暮に稽古始めに羽子板を持って来るように言われていました。で、羽子板を箱に入れて風呂敷につつんで用意していました。「かむろは袖の振り始め」の所を私はその羽子板をもつて二人で踊らせてもらいました。それから隣の子三人は「汐汲」のクドキの所を少しばかり踊った事も覚えていません。そして、いつも元気な子が屠蘇を一口のんだだけなのに「アーよつぱらつた」と行儀わるく座つてみせて、ふざけていました。

お正月と言えば我が家の雑煮のことが思い出されます。年に一度、正月雑煮用の大きな朱塗の雑煮碗が家族の一人一人に配られ、其れをいただいていました。それからお屠蘇をいただき、数ノ子、干柿の入った酢

の物、鯛の刺身、黒豆と色々とお料理がお膳の上に並べられていました。戦後になって私が中学生のころ、昭和二十三年十月七日より長崎くんちが久しぶりに復活し、お旅所が浜屋裏にでき各町の奉納踊も奉納される事になり、私もお師匠さんのご推薦で初めて銅座町の奉納踊に参加させて戴きました。銅座町の奉納踊は有名な永見徳太郎作の「長崎五人女」でも私も其の一人「愛宕山のおみね」に選ばれたのです。其の時の台詞は今でも覚えています。「さて其の次に控えしは、愛宕の山の峯づたい天狗だおしに耳なれて……くんちの朝は早く夜は遅くまで町の人達と一緒に「町まわり」をした事、そして其れは大変きつかつた事も覚えてあります。

又、夏には「ゆかたざらへ」が花月の庭であった事もありました。今思えば、ケイコ場も、街並みも、言葉も、ずい分かわってしまいました。(長崎歴史文化協会古文書研究会会員)

又ケイコ帰りには検番の前を過ぎ、髪結さんの「オモンチさん」の家の前を通ります。夏の「ゆかた会」で私が「子守り」を踊らせて戴いた時、其の昔「シコミさん達」が結っていたと言う「めがね」の型に結ってもらったのです。この時は嬉しくて、私は思わず習ったばかりの「子守り」の節を口ずさんだ事を覚えています。

それに又、踊り稽古の帰り道に一人が「わたあしや、どうでもこうでもあきらめられん……と唄えば「じゃによつて さぬぎのコンピラさんにガンかけましょか。」と続け、あいの手を口三味線で「チレ、トチンチトチンチシャン」と入れ、足で踊りながら歩いたものです。そうこうしているうちに一人ずつ減って最後は二人になります。

私の家の前は狭い道でしたが、この帰り道は昔、思案橋まで小舟が来て丸山に行く船のりさん達が登ってゆく道だったそうで、片側には赤提灯の店があったり、反対側には芸者さん達が住まっていた長屋がありました。今は丸山にあつた二つの検番もなくなり、昔の料亭跡に長崎検番が一つだけ残って名残を止めています。また小島の正覚寺に下る四・五段の石段の所が私達にとってオシャベリの場所でした。

其ころ、映画は二本立てで、私の友達に長谷川一夫のファンだと言ひまして「其の映画を見たい」とオバチャンに云つたら「ダキ合せの悪かけん行かんてよか」と言われたそうです。「ダキ合せ」と言うのは二本立ての映画の他の一本の事を言ったのです。いま考えると、其の「ダキ合せ」の一本が一寸刺激的な映画だったので友達に「行くな」とオバチャンは言われたのでしよう。

又ある時、「あの人はね、○○ねえさんば好いとんなつたとげな。それでも、○○ねえさんにとつては『藤十郎の恋』らしか……。」そんなら藤十郎子さんやかね」と言つたら、「藤十郎子はようなか、藤十郎さんの方がよかさ。いや、『ふじ子さんの恋』さ。」と言つて笑い合いましたが、当時

風信

○長崎出来大工町に桃溪橋と言う石橋がある。禅僧卜意が財を募り延宝七年十一月(一六七九)中島川と西山川との合流点に街人の為にこの橋を建造したので、当時の人達は禅師の徳を讃えて「意地蔵を建立した」と記してある。また、之の場所には両岸に桃の樹があり「橋名の謂也」とある。桃の節句の日(旧三月三日ー現三月二十四日)、私は桃溪橋を訪ねてみた。川岸には桃の花、梅の花、白い木蓮の花が満開だった。然し川岸には誰もいなかった。

○四月八日と言えば、お釈迦様の「花まつり」がある。お釈迦様は白象に乗つておられる。その白象が我が国に初めて渡来したのは、応永十五年(一四〇九)で其の地は長崎ではなく、長崎に最初に渡来した象は享保十三年六月十三日(一七二八)、廣南仕出しの唐船に乗つて七才の牡象と五才の牝象、それに象使いの唐人二人相添。十九日唐船を大波止に引き付け唐船より海岸まで材木を敷き象を上陸させ、唐人屋敷上段の空き部屋に入れている。九月十一日夜牝象一頭死すとある。

○この時天皇はじめ將軍も象をご覧になりたいとの事。翌享保十四年三月十四日、十三人の付き人と共に長崎出発。一日の行程五里、山道の険しき処三里。小さき橋は補修のこと。門司・下関の間は船を用意の事等と大変であった。五月二十五日江戸着。その間、京都にて観覧。此の象の登場については『象のみつぎ』を始め多くの資料説話が全国的に残っているので面白い。

○次に文化十年六月二十八日(一八一三)オランダ船三才のセイロン産象一頭載せ渡る。高さ七尺、鼻長さ五尺、早速幕府に献上の事を申し出るが許可なし。帰帆の節のせ帰る。この時、幕府はオランダ人に小麦百俵を象の食用として渡している。長崎では之の象を長崎版画に写し販売。大評判であったと記してある。

○三月十六日午後一時半より、史跡出島遺跡発掘現場にて岩永・野内両学芸員より現場説明会あり出席。出島についての新発見の事など大いに参考になった。

○長崎歴史文化博物館より同館所蔵の四八、〇〇〇点に及ぶ歴史美術作品の中より長崎の歴史文化を来館者の人達によりわかり易く、より深く理解して戴く為、常設展示室を四月一日よりリニューアル。実に長崎らしい資料の展示があり感激して帰った。

長崎歴史文化協会研究室

TEL 八二二一五四〇
十八銀行公会堂前出張所二F

